



TITLE:

『クレヴの奥方』 : 会話

AUTHOR(S):

高藤, 冬武

CITATION:

高藤, 冬武. 『クレヴの奥方』 : 会話. Francia 1968, 11: 28-36

ISSUE DATE:

1968-05-28

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137533>

RIGHT:

『クレイヴの奥方』

— 会 話

高 藤 冬 武

ことばのもつ現実性をはぎとって、男女の情愛を抽象的言語でつづるものだから、一見冷やかにみえるラファイエット夫人の世界に入るには、最初はとくべつの覚悟が必要であるように思ってしまうので、「タンド伯爵夫人」の中につぎのような一節を見出すと何かしらほっとした気持になるものである。

奥方はさいしよの頃はナヴァル公が大へんつつしみ深くするし、自分も貞操堅固と信じていたあまり、相手にも自分にも気を許していた。が、時と重なる機会はつつしみや貞操にうち勝ってしまった。今度の家に行つて間もなく、奥方は妊娠していることに気がついた。(岩波文庫、クレイヴの奥方、三二〇頁)。

現代仮名づかいに変更。以下引用はすべて同じ)

何かしらほっとした気持になるというのは、何もそういうことをことさら強調する要はないけれども、ラファイエット夫人のロマネスクな世界の男女の情愛にも、やはり、「妊娠」ということばがあって、それが情愛を動かす力ともなり、行きつく場所ともなっていること、男女の情愛以外の何ものでもない情愛というものが前提と

して納得されていることがこれらの「本質的な会話」にうかがえることなのである。言語の抽象的な働きでえがかれている世界に官能のうごめきがあるということ。ナヴァル公の新婚の夜、「奥方がその夜、どんなに落ちつかない一夜をすごしたかは想像するまでもない」(三〇三頁)という一行にこちらの想像力をさしはさむ楽しさがある。そして初夜の後の手紙がくるのだ。例を卑近にすれば、和服と身体の線の関係のようなもので、つつしみが官能をつつみかくしている。つつしみがとかれて、二人の男女にさらけだされる官能が想像してみたくなるのである。だからほっとする。

タンド伯爵がまた、自分の妻でもない人のように、奥方に恋いこがれたことだ。片ときもそばをはなれようとせず永いあいだ忘れていたあらゆる夫の権利を用いようという気になったのだ。奥方は軽蔑といていいくらい冷やかさ、手強さでおしのけた。(三〇九頁、傍点は筆者)

こういう箇所があると、やはり、ミッシェル・ビュートル(*)が指摘しているように、クレイヴの奥方がヌムール公に見られてい

るのも知らずに、あるいは知ってか知らずか、「杖」にリボンを結びつけている行為にとくべつの意味があると考へてもみたくなる。こういうことを強調する気は毫もないが、ただ、冷やかに淡々と流れている川も内部ははげしく渦巻いているというのがこの物語の前提の約束事である、そういうたいいのである。

「クレヴの奥方」の冒頭は、

アンリ二世在位の晩年の頃ほど豪奢や優雅の栄えたのはフランスでも例しのないことである。宮廷にこの頃ほど美男美女の会していたことはまたとないと思われる。自然が自分のあたえる最も美しいものをこの貴公子や貴女の上に撒きちらしてひとり興がっている、とても形容したい有様であった。(七頁)

という叙述ではじまっている。現代では失なわれ、顧みられないロマネスクにふさわしい冒頭である。現代では顧みられないのはこれが嘘であるからである。舞台はアンリ二世の時代ではあるが、それは当時(十七世紀)の宮廷生活の描写であるとされている。こういう叙述はことばへの絶対の信頼をもととしている。つまりは不動で堅固な社会に住むものの確信である。美男美女がどういう風に美男美女であるのかという具体的筆触はない。それは前もって納得されている約束なのである。しかしこの安定している宮廷も内部をのぞいてみると、

野心と恋愛とは宮廷生活の心髄のごときもので、男も女もひとしくそれに愛身をやつしているのである。(二三頁)

ということ、それは、「乱脈には陥らない一種の動き」がつねに

底にうごめいているのである。一見は堅固だが、つぎの時代へと移りかわろうとするきざしが、すでに、その内部にうかがえる崩潰しつつある十七世紀の宮廷(社会)を背景にしている、というのはマーン・ターネル(*)の意見である。ターネルはこの作品に十七世紀の時代性を強く認め、更には、シャルトル嬢が母親の情操教育をうけその結婚観に従ってする見合結婚がヌムール公の一瞥で失敗することについて、それは時代の既存のモラルに対する強い作者の批判であるという論をすすめている。この物語を読むのにそういうことにあまり深く立入る必要はないと考えるけれども、歴史と時代の考慮がこの場合鑑賞をさまたげはしないけれども、とにかく、舞台背景にこういう表裏があることが、何かしらそこでくりひろげられるクレヴの奥方とヌムール公の道をはずれた恋愛に陰影をほどこしているようである。三の巻の終りで、野試合で王が不慮の災難をうけると、つぎの四の巻の冒頭が宮廷の勢力関係の一転となり、ヴァランチノワ夫人の隠遁となる。こういう背景がかもしだす不安、危惧といったものが各人物にその淡い影をおとしているようである。

「クレヴの奥方」を情熱と義務、情熱と理性の対立葛藤にその美しさを見ようとする見方がある。そのとき、人々の口にのぼるのが古典主義の立場であり、コルネーユの義務、ラシーヌの宿命的な愛ということになる。この作品は、コルネーユ悲劇を散文へ置きかえたものと見たのはランソンである。ものごとの対立に美を見るフランス的発想からすれば、まさにこれは教科書的な作品であろう。そこで問題になるのが奥方の告白であり、最後の一見計算されつく

したような別離の道理である。

ものごとの始まりは coup de foudre が常套でその力と己れの存在との対立葛藤である。「ラファイエット夫人の作品の唯一の目的は、情熱と存在の關係を見出すことである。」(ジョルジュ・ブーレ(*)この小説では、奥方とヌムール公の出会いがまさに一言の説明も不可能な coup de foudre であり、夫をもつ身が己れの存在ということになっている。「coup de foudre」として現われるのが本当の情熱である」とは先のブーレの言である。存在(existence)とは社会の規範に則って育ち行動してきた規範内の存在である。そして、具体的には、夫という規範の内にあるので、その夫は奥方にとっては、

姫君(奥方)は、自分もあの方(クレヴ殿)の良い性質がよくわかつてゐるし他の人達の妻になるよりはあの方の方が望ましくさえある、しかしあの方の人柄に別に愛着を感じるわけはないと答えた(三一頁)、

というものであり、女の唯一の幸福とは、「夫を愛し夫だけに愛される」ことと納得して疑わなかった母親が選んだものであった。皮肉なのは、その夫はシャルトル嬢に coup de foudre に打たれたことであり、自分の気持のみが一方的に先ばりしてシャルトル嬢がそれに応えてくれないことが不満であつて、彼女に恋の焦燥も不安も憐みも感じていないと不平をこぼし、更に、

あなた(シャルトル嬢)は世間体で遠慮しておられるというのでなく、むしろ世間体のためにこのようにしてくださるのですよ。私のことはほんとうのあなたの愛にも心にも触れていない

のだ。私をごらんになっても喜びも心の動揺もお感じにはならない(三二頁)、

と詰問する。coup de foudre に打たれた男がその経験のない無知な女に情愛を身体で示せと無理をふっかけける。女人女の情愛(emotionalities)の密度を素人に求めて得られない不平不満みたいなものだ。今度は奥方が皮肉にも、夫の求めていたものをヌムール公に与えてしまう。

間もなく(ヌムール)公の姿は奥方の心のうちに強く刻みつけられてしまった。

更には、母親にもその素振りを気づかれてしまう。

あなたはヌムールさんを好いている。(三九、六二頁)

そして、これは夫と奥方の場合の一方通行ではなく、ヌムール公もそうなのである。coup de foudre に両方が打たれて夫婦になるのならそれは物語にならないので、クレヴ殿とシャルトル嬢に行きがちがいを設定し、奥方とヌムール公に出会いの効果をともにたせるのは物語のすすみとして必要なことであつて、その夫に皮肉を見るのはあたらないかもしれない。

サンセールがトゥールノン夫人の死後、彼女に欺かれていたのを知つてその無念をクレヴ殿にかこつ場面がある。トゥールノン夫人というのは、その頃まだ死んだ御主人のことが忘れられない様子で世間からかくれて貞操堅固な生活をしていたが、サンセールと好いた仲になり、クレヴ殿にいわせれば、「行ないを外から見ているれば非の打ちどころがなくしかも恋人にあればほど優しくできる女を

私はほかに見たことがない」が、しかし、「実際とは全く違う人間のような顔をして世間を瞞著していた」女なのである、(六七頁以下)。「女の不幸と人の死と二つの悲しみを同時に味わった」サンセルが錯乱しそれが極端にいたると、殿は、人の悲しみにも慎しみがあれば同情もできるが、理性を失い、自制心を失ってしまおうと憐憫にも値しなくなると諫めるのである。男女の浮きごとに涙を流すもよいがほどがすぎれば見苦しいという粹な忠告なのかどうかかわからないが(それもあるかもしれない)、この意見はクレイヴ殿が他人のサンセルに対していう外のことばなのである。量見が狭いと諫める殿も、奥方の告白をうけると、サンセルのように直情ではないが陰にこもって女らしい傷手をうける。タンド伯爵とちがって、無念をはらすべき度量はないが、その傷口は水の中で火薬がばちばちはねるようなものである。悲しみにも慎しみがあべしというのは社会の側の巧妙な教えであるかもしれない。その規範をとび越えさせまいとする社会の配慮ととってとれないことはない。

この作品には三つの声がある。一つは作者の声で、それは作品の基調をなすものであり、他は各人物の公の声と私の声という具合である。先のサンセルの場合、サンセルの声は私の声であり、クレイヴ殿のは公の声である。そして、殿もそのときがくれば私の声で語ることになるのである、(以上ターネル)。各人物がおたがい公的、私的声をまじえてディアログをつづけていき、その間に語り(作者の声)がある。本当は、語りがあって、その合間に語りにふさわしい公の声、私の声がおりなすディアログをばっはんばっはん効果的にちりばめていくといった方が語りの質と量からいってよ

いようである。声というのはことばのことである。

二人の主人公達が会って会話をするのは、すれちがいざまにける声も入れてたつた九回である。二人のみの場面は三回である。

その三回の中の二回は会話とはいえず、もっぱらヌムール公が機会を何とかしてつくって奥方をとらえようとするもので、奥方は意味のあることばをかわす訳でもない。二人が初めて二人きりで会うのは、ヌムール公が奥方を遠まきに口説こうとするもので、それは鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がすという口説きで、奥方はその真意を知りながらひらりと身をかわして別室へしりぞいてしまう。そして、そこで語りが身を焦がす奥方の内情を語ってくれる。この連続がこの小説の流れである。告白の後、夫がどうしても相手の男を知りたくて奥方に鎌をかけてほとんどその男の名前を確信してでていった直後、公がきて気持をかこつが、きく耳もたぬというのが奥方の言う唯一のことばである。二人が本当の意味の会話するのは物語の最後で、それは決定的なものでそれとともに物語は終り二人の別離ということになる。初めて遠慮なくおたがいの底をはなすことができるとき、その会話の結論は別離になるのである。作者は二人に会話をさせない。二人の会話は、それは肖像画であり、他人の手紙であり垣間というものののだ。残る六回は、いずれもヌムール公のみがすれちがいざまに短いことばをかけるか、あるいは第三者が傍にいてヴェールのかった遠慮深いことばである。二人はほとんど最後の会話にいたるまでことばをかわしていないのだ。公がしゃべりたくても奥方が逃げてしまう。奥方が逃げないときはだれかそばにいて見ている。これは一種のすれちがいの小説である。そし

て、そのすれちがいの妙を見せるのは、肖像画を盗んででていきさまに公がかけることばであり、クロミエの館で庭を散歩しながらメルクル夫人を傍においての二人にだけは通じすぎるほどのよそよそしい会話なのだ。

私のした大胆なことを御覧になったとしても、どうか、あなたはお気づきないのだと私に思わせてください。それ以上のことはお願いいたしませんから。(一〇三頁)

おもしろいのは公に恋を語らせまいとして、肖像画を与える奥方はそのことで恋を語らせているのであり、自らにも恋を語っているのだ。タンド伯爵夫人が妊娠したのは奥方が自分の肖像画を公に与えたのと同じやり方で肉体に眼をつぶった結果ではないのか。関係をもちながら本当は関係をもっていないと自分にいつくろう隙を心に残しておくのだ。

眼でおたがいに情愛を語っていくのである。その頂点がクロミエの館の垣間であり、絹細工師の窓である。垣間見られたのは奥方は充分承知している。しかも、それは奥方が無意識に公の情愛に心をうばわれているときで、すっかり何もかも見せてしまうのである。インドの杖が何を象徴するかはともかく、奥方は自分の決定的な秘密を相手に見せてしまったのだ。それは心の秘密であり肉体の秘密でもあろう。肌を盗み見されたようなものだ。そして当人は見たものが公ではなからうかと危惧し赤面し、また公であってほしいとも思うのだ。ごく最近クロミエの館へきたことがある、見たことがあるとメルクル夫人を傍にして公が耳もとにささやけば、

……奥方は真赤になった。そしてヌール公の方は見ないで

眼を伏せたまま、「あそこでお見かけしたようには覚えておりませんけれど。おいでになったとすれば、あたくしの知らないときなのでございましょう」、と幽かにいった。(一二三頁)

二人とも知っていないが知らないふりをして、つまり知っている、知っていないは論外として共通の事実には眼を伏せたままこのようなそらざらしいことばをつかう。まとははずした会話をすることでかえってそのまを楽しむのだ。ことばには、対象からいくらばなれても対象を直截に表現する力があるものである。対象とは当事者の秘密である。二人にとっての秘密とはもはや二人には秘密ではないのにそれをやはり秘密としておくことが男女の会話の妙なのだ。二人は事実を語らない。最後の対決をのぞいては。事実にはヴェールをかぶせたままである。

明らかにことばをつかうのは夫のクレージュ殿である。奥方の告白をうけるとどうしても相手の男の名前を知りたがる。ヌール公を怪しいとらんで鎌をかけたります。夫のもつあらゆる権利をつかってしゃべるのである。こういう権利には限度がない。夫の権利が執念にかわる。相手の男がだれだか知りたがる。怒らないから名前だけという。この性急さは日常よく見かけるものだ。名前を知れば、それは当然すぐにいちばん知りたいこと、何かあったのかということになる。何もなかったといわれても信じられない。信じる気にならない。あたりまえのこと、何かあったのかときくのは疑問形ではなくあったといわせたい強い命令みたいなものだ。何かあったと答えられたらどうする。どうするでもなく執拗にきく。逆にいえば、そもそも告白というものが必然的に夫には「不義」というこ

とばを事実とさせ、確かめるすべもなく事実としか思う以外に道のないその「不義」をふくんでいるのである。奥方は告白の誘惑を二、三回もつのであるが、それは *l'usage de sincérité* である。奥方には *sincérité* でもそれをきかされる夫にはそうはいかない。告白をしてみたい気持ちにかられるのはいずれもヌムール公の眼に射すくめられたときで *sincérité* の問題よりも不在証明のようにも見える。公に陶然となつて、その陶然の様からさめると後悔がわいて、もうしませんと夫に誓つてみたくなるのだ。それはまさしく字義どおりの後悔で事後のことなのだ。告白はするけれども名前の告白はぜったいにしない。名前を明かしても明かさなくても、告白は必ず互解にいきつくもので、「騙しつづけてはしかなかった」という死の床の夫の切実なあきらめのことばになる。事実がことばより強いときも、ことばが事実より強いときもある。嘘を本当にさせてしまう力がことばにあるし、ことばが嘘になつてしまう事実もある。告白のことばの力のために虚の「不義」ということばが力をもって夫には事実となつてしまう。しゃべつたことで不義が事実になり、今度はしゃべることその事実を消そうと奥方は努力する。奥方と夫の会話の本質はここにある。そのために夫は死んでいく。

クレージュ殿がシャルトル嬢を見そめたのはことばの介入しないものの世界であつた。嬢はヌムール公と出会うまでは母親のことばで育てられたことばの世界の女であつた。サンセールをなぐさめさす殿は公の声でしゃべつた。告白をうけて焦躁し衰弱していく殿は私の声をむきだしにする。死の床で殿はいう、

「私はしかし、あなたのために苦しめられて死んで行くのですよ

……「二一七頁」

死んでいくものことばだからうらめしい。殿はほんとにうらめしい存在であつた。殿は皮肉に描かれている。

この小説でいちばん分量の多い会話は奥方と殿の会話である。サンセールのエピソードがそれに含まれているとしても、やはり二人は二人のことについてかなりしゃべっている。告白があつてからの会話が中心だが、二人のかわすものは会話ではどうしようもできない主題であるから、主題のまわりで行きつくということがないぐるぐるまわりの空転をくりかえすのみである。行きつく所が、一致する所がありそうに見えても外部の事情が生じたまた空転する。二人は熱っぽく語るけれども実は何も語っていない。古来、人のくりかえしてきた男女の、夫婦のきまつたことばをくりかえすのみである。露は尾花と寝たといふ、尾花は露と寝ぬといふ、あれ寝たといふ、寝ぬといふ、ふざけていえばこんな調子である。

先にふれたように、奥方とヌムール公のかわすことばはたいてい公の一方的なものだが、奥方はそれに射すくめられてしまう。それを語りぐくわしく語ってくれる。人の一言が与える作用の力にははかり知れないものがあるが、公の一言がそうだが、更に、事実の力がある。肖像画を失敬することが恋する男女には万言にも価する。

宮廷で最も美しい人を恋して、その人にいわば無理じいに恋させたのである。そしてその人の一つ一つの動作にまだ純真な若い年頃のひとの恋したときにあり勝ちな落着きのない容子がありありと見えているのだ。(一〇三頁)

これは夫婦が望んで得られなかったものだ。奥方のこういう姿を公

は楽しむのだ。恋愛の初期にみられる、一人の女をつくりあげてゆくといった楽しみが肖像画のくんだりでかかっている。野試合の馬場での公の事故に見せた奥方のとりみだし、手紙偽造のときの二人の様子、夫の死後の絹細工師のくんだり、公園での一遇といったぐあいに二人の間は事実をとおして煮つまっていく。事実の描写としておもしろいのにこういうのがある、

Mme de Cleves y vid le Duc de Nemours... Les jours suivans elle le vid chez la Reine Dauphine... elle le vid jouer... elle le vid courre la bague, elle l'entendit parler...

(プレイヤード版、一二七頁)

そして、その事実の間にばつんばつんとちりばめられている奥方のことばはまったくとりつくらったものであり、相手との会話を避けようとしてよぎなくさせられる逃げのことばであって、それは会話とはいえない。事実がおよぼしたものの、相手のことばがおよぼしたものはすべて語り文の中で詳細に説明される。(そして奥方や公のモノローグが作者の語り文の中に巧妙に入りこんでいる。三人称で語られている語りが知らず知らずに我々の頭の中では一人称に置換されていき、たしか三人称体のはずだったがとつまらない興味をもつてよく活字をみてみると、やはり置換があつて *elle* がいつのまにか *je* にかわつていく。いつかわつたのかたどつてみるのも面倒くさいくらいその変化は微妙である。この小説の語り文には不思議な魅力がある。こういう印象がして、こういう印象でこの作品を読んだということであるが。)

夫がなくなつて、ヌムール公を避けとおすことで奥方は(公を知

る前の)心の平静をいくぶんかとりもどすが、絹細工師の所とその直後の公園散策とによってそれもすぐずれて動揺が再びはじまる。その動揺は、公をうけいれてもよい、公をうけいれないというおぼろげな気持と、「あなたのために苦しめられて死んでいった」夫の顔である。

「亡霊のような義務感」と、結婚後の公の裏切りの予想と、現在の瞬間という三つのファクターを時間の面からブルーレはこう考えている。過去を現在につづけ、未来を現在に先取りして、過去、現在、未来という人間の生の時間を流れさせる *le temps* の *fantôme de devoir* は *passé présent* び *risque d'être trompée* から *repos* (futur) が、そして現在の *moment de passion* である。奥方が公との唯一の会話でたどつていく *raisonnement* をこう考えている。

ことばには相手を納得させる意図とは別に、自分を納得させる、すくなくともしゃべっている間だけでも自分を納得の枠内にとどめておこうとする意図のものがある。奥方の心はヌムール公とはなす前からすでにきまつている。その決心の理由づけが読者にできたとしてもそれは絶対なものではないだろう。不幸な結婚に終るだろうという危惧がその一つだとしても、一つの不幸をすてて別の不幸をとる理由づけはできないのである。裏切られるかもしれない結婚は不幸である。そのために、「お会いしなければ一生誰も愛しなかつたに違いないそんな女に恋させた」(二四三頁)

その相手をふんぎるのはこれまた不幸である。常識の世界では二つとも不幸であるのでそれを論じてみてもはじまらない。つまりは、愛する男女が心ならずも目的をとげられないというのが男女の世界

の美なのである。それは理屈のとどかない、理屈とは無縁の世界なのだ。

物語の終りの二人の分量の多い会話は最初からからまわりするもので行きつく所はない。すでに心をきめているものが会話に臨んだらそれはしよせん実のないものである。奥方は最初にして最後のものが公にはつきりとうちあける、

……もう率直に何もかも申します。あなたはあたしがあなたにお会いする前には全く知らなかったある気持を、もたせておしまいになりました。(二三四頁)

しかし、それは、

こう告白した後はまた別のあたしくしにかへるつもりですから。

義務だと考えている 慎み深い態度にかへるあたしなのですから。(二三五頁)

公園でやつれたヌムール公の姿を見かけたときの奥方の前後の気持は、

……ヌムール公の恋と奥方に対する思慕とそれだけが向いあっているばかりである。(二二七頁)

そうして偶然のように公につかまってはなしをきりだされると、奥方の態度は先に見たとおりである。なぜそういう態度をきめたのかは語りもはつきりとは明かしてくれない。奥方がしゃべることばに見るだけだが、それは公を相手にしゃべるものの理屈であるから解明はできない。なぜ公のもとをさるのか、公を去らせるのか考えてもせんかたのないもので、それはそのままにしておいて、はじめて奥方が公に許した会話をよくきいてみると、信用できないような気が

してくる。何をよりどころにして奥方の心の内をのぞいたらよいのか分からなくなってくる。心理をことばでたどるのがせんさくに思えてくるのだ。肖像画の心理、クロミエの館の心理はよく分る。思慕と思慕とが一切の障害物をとりのぞかれてまさに向いあうそのときに、二人の恋人が動こうとするそのときに何かが消えていつてしまふのだ。その何かを作者は説明してくれないし奥方も語らない。ヌムール公はそれを知りたいけれどもそれも叶わない。思慕が煮つまつて頂点にたつして一歩動くとその思慕がマイナスの力をもつてくるのだ。

作者と関係の深かったラ・ロシュフコーの箴言にこういうものがある。

人がみずからの情熱に耐えるのは、みずからの力よりはむしろ、情熱の弱さがそうするのである。(箴言一二二、岩波文庫)

情熱に耐えるとは、情熱の弱さとは男女の間では具体的にどういうことか、それを考えてみてから奥方の心理をたどってみる、順序はこうなっているらしい。

クレヴの奥方は決してみずからのことばで語っていないようだ。みずからのことばでは語れない種類のものが心の中にうごめいているのだ。それを作者が少しは明かしてくれるが最後の段階にいたるともう作者の手にも負えないらしい。奥方のことばにでてくる心理、作者が語ってくれる心理のほかにもう一つことばでは語れない心理が隠されているのだ。だから謎が残る。ヌムール公が垣間見したように、作品をよむたびに奥方の秘密をすこしずつ垣間見している、そういう楽しみがこの物語にはある。そう考える。

- * Michel Butor, Répertoire
- * Martin Turnell, The novel in France
- * Georges Poulet, Etudes sur le temps humain